

奈良教育大学附属中学校「裏山クラブ」への支援 活動報告書

社会科教育専修2回生 木幡美幸

1. 日時：2024年3月20日(水)13時～16時
2. 場所：奈良教育大学附属中学校
3. 参加者：英語教育専修3回生 苗代昇妥
美術教育専修3回生 原田佳奈
美術教育専修2回生 東瑞
社会科教育専修2回生 木幡美幸、島田望希
国語教育専修2回生 吉岡優来

4. 活動内容の概要

奈良教育大学附属中学校「裏山クラブ」の生徒が奈良教育大学附属小学校の児童、奈良教育大学附属幼稚園の園児に対して自然を活かしたクラフト体験を実施する活動の支援を行った。大学生も幼児～小学校低学年向けに、枯葉を使った見立て遊びを活かした作品作り、松ぼっくりけん玉のブースを運営した。

5. 参加学生の学び・感想

今回の活動を通して、二つのことを学んだ。まず一つ目に子どもたちの創造力が豊かであるということを実感した。葉っぱの切り抜き方や貼り方だけでも、子どもたちはこだわりを持っており、その子なりの作品を創ろうと努力している姿を見ることができた。ここから、大人はもっていない創造性があることを理解し、このような力を育てていくことが重要だと感じることもできた。次には試行錯誤する大切さを学んだ。子どもたちは、おもちゃ作りの際に色々な工夫をしながら取り組んでいた。例えば、けん玉の紐の長さを何度も試している子どもがいたが、その子は他の長さも試してみたいので家に帰っても続けてやってみると言っていた。作る過程でただ楽しむだけでなく、子どもの力を育てるきっかけになったのではないかと思った。

(英語教育専修3回生 苗代昇妥)

幼稚園児や低学年の子どもと関わると、想像していた姿とは違った点がいくつもあり学びになった。例えば自分以外のことに無頓着で、自由に製作を行う子どもが多かったように思う。

このような年齢の子どもたちに楽しく創造的な活動を行ってもらうためには、道具や場所といった環境づくりや自由な製作を見守る力が求められると感じた。逆に中学生の授業などで求められるような、周りを気にして積極的に参加できない子どもに対しての活動は必要でないと感じた。

また落ち葉を使った製作活動に関しては、完成作品がある程度類似しており、創造力を働かせるというよりは手を動かす面白さに焦点をあてた活動になっていたかと思う。もっと子どもに自由な発想をさせるために、「想像上の動物」などといったお題を設定してみても面白いかもしれないと考えた。

(美術教育専修3回生 原田佳奈)

今回の活動で、子どもの豊かで柔軟な発想力について学んだ。

見立て遊びを活かした作品作りのブースでは、穴あけパンチをこちらが意図した用途で使わずに素敵な作品を作った子どもがいた。松ぼっくりけん玉のブースでも似たようなことがあった。このような子どもの姿から、子どもの柔軟な発想力やそれを活かした可能性を大いに感じることができた。同時に、このような発想力を活かせるかは周囲の環境による影響が大きいのではないかと考えた。そのため、子どもの発想力を引き出す、活かせるような声掛け、環境づくりについて今後学びを深めていきたいと考える。

(社会科教育専修2回生 木幡美幸)

松ぼっくりけん玉までは、紙コップとペンなどを渡された子どもたちが、自身でデザインを考え、懸命に描いたり貼ったりしているのが印象的だった。紙コップが完成した後に紐に結んだ松ぼっくりをつけるのだが、子どもたち自身が松ぼっくりの大きさを変えたり、紐の長さを変えたりするなど試行錯誤して難易度を調整していた。なかには紙コップ自体をモンスターボールに見立てた子もいて、おそらく松ぼっくりをポケモンに置き換えて考えていたのではないかと、その発想力に感激した。実際のけん玉とは形状が違うが、「けん玉じゃない」という子どもはひとりもおらず、自然と関わる遊びを純粋に楽しんでいたことも印象に残った。

(社会科教育専修2回生 島田望希)

「子どもは小さな芸術家」という印象を受けた。芸術家は普段の生活から受けた刺激を基にテーマを設定し、表現・展示法を模索する。今回参加した子供たちは自分の好きなモチーフを一つの物語の中に集約して表現し、暗闇やライトで見え方を確認し、作品の雰囲気合った適切な展示法を模索する姿が見られた。だが、「良いものをつくろう!」と真剣に作成する姿勢はなく「とりあえず完成させよう!」というレベルにとどまり、好きなキャラクターの羅列が行われる表現にとどまった。彼らの斬新な発想を適切な描写表現に生かすために、児童絵画におけるてきせつな指導や声掛けについて模索していきたい。

(美術教育専修2回生 東 瑞)

活動を通して、印象に残ったことが2つある。まず、児童の自主性に任せることが大事だということである。葉っぱや枝を画用紙からはみ出して貼っていても、ボンドがはみ出ている、大人が手を出すべきではない。児童が思い描く作品を自分自身で作ることで、「もう一度作ろう」と思ったり、「家でもっと付け足そう」という意欲が湧くと学んだ。次に、「もったいない」という意識が重要だということを感じた。葉っぱの型抜きでは、くり抜く場所を工夫し1枚の葉っぱでいくつもの形を作っていた。そのような意識づけを私たちが行うべきだと実感した。

(国語教育専修2回生 吉岡優来)



図1 見立て遊びを活かした作品作りに取り組む子ども達



図2 完成した松ぼっくりけん玉